

2024年8月18日（聖霊降臨後第13主日、特定15、B年）

牧師メッセージ

「ああ、美味しい」

（ヨハネによる福音書6：51-58）

司祭ヨセフ太田信三

ヨハネによる福音書では、イエスはこれまでもご自身を「パン」と言ってきました。しかし、これまでの「パン」は神のみ言葉を表す比喩的なものでした。しかし、今日の箇所です。「このパンを食べる者は永遠に生きる」と言われているパンは、「わたしの肉」「わたしの血」、つまり実際に口にするとご聖体、パンとぶどう酒を通していただくイエスの体を表していると考えられます。

「このパンを食べる者は永遠に生きる」と言われるように、イエスはみ言葉というパンを私たちに与え、さらにご自分の肉と血によって私たちの命そのものになってくださいます。しかしそれは、信仰を持たぬ人から見れば意味不明、異常と思われるもおかしくないことでしょう。迫害下にあった初代教会時代、聖餐式について「あいつらは人肉を食べているらしい」と噂されていたことが記録として残っています。今日の福音においても、イエスが自らを肉と言ったことに多くのユダヤ人はついていけなくなり、それがいったいどうして可能なのかと言いつ争いました。彼らにも、人を生かす「パン＝言葉」までは認めることができました。しかし、イエス自身がそのパンであることは受け入れがたいことでした。イエスの肉と血をいただくということは、信仰によらなければならぬことなのです。信仰者にとっては、イエスは神の言葉であり、「肉」であり「血」なのです。そして、それにあずかることができないと飢えてしまうほどに、命に必要な糧なのです。すでに亡くなった信徒さんですが、その方がご病気で教会になかなか来られない時期を経て、徐々に聖餐にあずかったとき、「ああ、美味しい。」と心から仰っていたことを思い出します。私はその言葉、その思いは信仰者の真実であったと思います。

聖餐式の構成は、前半の「み言葉」部分から、後半の「聖餐」へと続きます。私はこの流れは今日の福音によるものであると感じます。つまり、私たちはみ言葉を聞いて、納得して、満たされて終わるのではない、ということです。むしろ、納得も理解もできずとも、聖餐によってみ言葉なるイエスを「食べてしまう」ことによって、内側からいのちそのものになっていただくのです。納得や理解を超えて、イエスが肉となり血となつてくださるのです。そればかりか、共同体全体で同じイエスの肉と血をいただくことで、私たちは同じキリストの体に結ばれ、一つの体とされます。つまり、私たちは個人においては、自らのうちにイエスが「受肉」してくださるからこそキリストと共なるいのちとされるのであり、共同体としては一つの体によって結ばれることによって、真の神の家族、真の教会とされるのです。

イエスが私たちの肉となり、血となつてくださっている事実をこの身に、この共同体に感じて、イエスと共なるいのちを生かされてまいりましょう。